

公表

事業所における自己評価総括表

○事業所名	PONO			
○保護者評価実施期間	令和8年 3月 1日		～	令和8年 3月 20日
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	30名	(回答者数)	28名
○従業者評価実施期間	令和8年 3月 1日		～	令和8年 3月 20日
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	7名	(回答者数)	7名
○事業者向け自己評価表作成日	令和8年 3月 29日			

○ 分析結果

	事業所の強み(※)だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	脳幹アプローチの考えに基づく運動療育を実施していること	<ul style="list-style-type: none"> 一人ひとりの感覚の弱さを見つけ、遊びながら感覚統合を促すことで発達に的確にアプローチをしている。 発達年齢でグループ分けをし活動内容を設定することで、より一人ひとりに合った支援を行なっている。 	<ul style="list-style-type: none"> 定期的に脳幹アプローチについての社内研修を実施し、支援の質の向上を目指す。 日々の活動内容を振り返りブラッシュアップする。
2	子どもの様子を細かくフィードバックしていること	<ul style="list-style-type: none"> その日の様子を文章や写真で伝えるだけでなく感覚統合に向けての話や家庭で出来る発達遊びなども伝えている。 どの感覚にアプローチしているか等、活動内容の目的を細かく伝えることで発達に関する保護者の理解を促している。 モニターで保護者がお子様の様子を見ることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> モニタリングの機会だけでなく送迎時や来所時にも子どもの姿や今後の課題等を伝える。 進路・療育・医療機関などお子様やご家庭の悩みに合わせた情報発信をしていけるよう知識を深める。
3	関係機関と連携や情報共有を密にしていること	<ul style="list-style-type: none"> 各関係機関と支援の統一化を図るため定期的に併設幼稚園と情報共有の機会を設けたり外部の園に訪問して子どもの様子を観察し支援方法のフィードバックをしたりする。 支援に偏りが出ないよう適宜相談支援専門員にも助言を仰ぎ支援の幅を広げられるようにしている。 	<ul style="list-style-type: none"> モニタリングを行なう際に各園の担当者や情報共有を図りその上で保護者に子どもの様子や支援策を伝えているが、不十分な時もあったのでさらに連携を密にとる。 各機関で支援にばらつきが出ないよう情報共有をこまめに行ない支援方法のすり合わせを継続的に行なう。

	事業所の弱み(※)だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	保護者への説明が不十分な時があったこと	日々の活動内容については丁寧に説明しているが、緊急時のマニュアルや避難訓練の実施などについて周知しきれなかった。	<ul style="list-style-type: none"> 契約時や懇談会等の保護者が来所するときなどに説明する機会を作る。 避難訓練を実施した際には連絡帳に記載をする。
2	専門的知識を深められる機会が少なかったこと	発達特性に応じた専門的支援について知識や実践力が不十分な時があった。	<ul style="list-style-type: none"> 発達特性に応じた専門的支援の向上を目指し外部研修への積極的な参加や専門職との連携を図る。
3	情報共有を行なえる関係機関が少なかったこと	関係機関との連携は園や相談支援事業所が主で、それ以外の関係機関と繋がりを持つことが難しかった。	<ul style="list-style-type: none"> 支援の幅を広げる為にも通園している園だけでなく発達センターや病院、他の通所支援事業所などにも積極的に連携を図る。 市の連絡会や研修への参加を通して横のつながりを持てるよう努め、その関係性を継続的な連携へと発展させていく。